**№20　テーマ『人格の高さをつくる』**

**講話日2006年8月7日**

**司会：では、本日、「人格の高さをつくる」というテーマをもちまして、ご講演をいただきます。それでは、芳村思風先生、よろしくお願いいたします。**

**芳村：はい。皆さん、こんにちは。**

**一同：こんにちは。**

**芳村：本当に大変暑い夏になりまして、外で働いてる方々、本当に大変だと思います。どうぞ健康に気を付けて頑張ってください。私もちょっと今日は風邪気味で、声がちょっと枯れてるような感じなんですけど、時間いっぱい頑張ってお話をしたいと思います。今日のテーマは、「人格の高さをつくる」というテーマですね。その人格とはなんなのかということについては、いろいろこれまでもお話をしてきましたけども、とにかく人間というのは、人格を持って生まれてくるのではないんだ。生まれてからのちに努力をし、また、社会の中でいろいろ教わって、そして、人間の格を獲得して人間になるという、そういうこの生き方をするのが人間であります。人間は生まれたときには、動物学上の分類における人類に過ぎないという、そういうこのあり方で生まれてくる。だから、人格は、生まれてからのちに努力して獲得するものだということをまずは考えてみなければなりません。**

**そこで、どういう努力をすれば、人間の格というものがですね、自分に備わるのかということを、考える必要があるわけですね。このことについては、もうすでにお話をしてありまして、人間が人間の格を獲得するための３つの条件ということを実際にお話をしてあります。復習して思い出してもらいたいんですけども、人間が人間の格を獲得するための基本的な努力の目標というものが３つあります。これは、第１番目は、不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さ。謙虚さのない人間は、人間としての格がない。傲慢であることは、人間の格を根底から失格することである。まずはですね、不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さというものを自分のものにするために努力しなければならないと。第２番目は、より以上を求めて生きる。人間としてもっともっと成長したいという、そういう成長意欲を持って生きることが第２番目の条件である。第３番目は、人の役に立つことを喜びとする感性。人の役に立つことを喜びとする感性というのは、具体的には愛ということですけど、この愛の心、すなわち、血の通った温かな心というものがなければ、人間とは言えない。この３つの目標を意識しながら努力することによって、だんだんと人間の格というものが人間には備わってきます。**

**そういうふうにして、こうつくられてきたこの人格というものがいったいどういうものなのかということを考えていくと、人格というもののその結果として出てきた世界、人格の世界というものが、どういう構造を持って存在するのかということにもなってくるわけなんですけども、基本的には、この人間の世界というのは、３次元という、構造を持っておりますので、人格というものを３次元という構造を持つものとして考えなければなりません。命というものは、肉体を見ても、この３次元、立体的な、そういう構造を持っておりますので、その意味で人間的世界というのは３次元という構造を持つものとして考えなければなりません。だけども、学問的にそのことを考えていくとどうなるかというと、この人格をつくるための努力、人間の格をつくるための努力をした結果、出てくる人格というのはいったいなんなのかというと、この人格とはなんのかということを簡単に言ってしまうと、それはその人が何を意識しながら、この人生を生きておるかというですね、人格とは意識の内容であるというふうに、言うことができるわけなんですね。　ということは、お金のことばっかり言ってる人はそういう人格の人だし、また損か得かというようなことばっかり言ってる人もそういうことだし、また善か悪かというようなことばっかりこう気にしてる人はそういうふうな人格だし、正しいか、間違ってるかということばっかり考えてる人はそういうふうな人格だし、その人の意識の内容というものが、どういうこのものかによって、その人の具体的な人格が決まる。人格はその人の価値観によって決まると言うことができるわけであります。どういう価値観を持ってその人が生きてるかによって、その人の具体的な人格の内容は決まってくる。ということは、人格というものは意識の内容であるというふうに、言うことができるわけですね。**

**ところが、この意識の内容というものは、言葉によって表現されなければわかりません。その意味で、意識というものは言葉によって表現される世界だというふうに、言わなければならない。ところが、言葉というものは、一人称、二人称、三人称という３次元という、そういう構造を持っております。なぜいったい言葉というものが、三人称という、そういう構造、３次元の構造を持っておるのか。それは、意識というものはどういう働きをするかと言うのは、命が存在する空間の構造を写し取るというね。すなわち、意識というのは、この外の世界の構造を写し取って、外の世界をこの知識化するというか、そういう働きをするのがこの意識の働きです。これはどういうことなのかといったら、新しい町に行って生活をしようとするときに、まずどういうことを人間はするかといったら、これから自分が住もうとするその町に銀行はどこにあるのか、郵便局はどこにあるのか、スーパーはどこにあるのか、パチンコ屋さんはどこにあるのか、映画館は、どこにあるのか、質屋さんは、どこにあるのかということで、自分が、必要とするものがどこにあるのかを、まず探し求めて、それを知ろうとするわけですね。**

**知ろうとするということは、外の世界を自分の意識の世界に移し替えるという、そういうことをするわけで、それが意識の働きであります。それで、基本的に意識というものは、外の世界の構造をこの知識化して、そして、自分の内的世界に移し替えるという、そういう働きをするわけです。これは学問的に言うと、科学とか、哲学というのは、科学というのはこの事実の世界の、構造を写し取って、法則だとか、そういうふうなかたちで外の世界を自分の意識の世界に取り込むわけですね。また、哲学なんかでも、人生という、そういうこの現実の社会の舞台というものを、いろいろ考えて、そして、その人生の法則というようなものをこの自分の内的世界に取り入れて、それを自分が意識しながら生きるということをしておる。だから、学問というものは、だいたい皆、外の世界を写し取って、それを自分のこの内的世界の知識として、持つことによって、外の世界に適用して生きていくということを、するわけであります。そういう意味で、意識というものは外の世界の構造を写し取るという働きをします。**

**ところが、その外の世界という空間というのは、３次元という構造を持っておりますので、意識が外の世界を写し取って、内的空間というものを意識の世界としてつくると、その意識の世界も３次元という構造を持たざるを得ない。その意識を表現するものが、言語、言葉であるから、言葉も３次元という構造を持つ。だから、人類が遣う言語というのは、どの民族の言語を取っても、一人称、二人称、三人称という構造を持つものであって、三人称以上の構造を持つ言語は存在しません。それは空間が３次元だから、そのことによって意識が規定されて、意識も３次元という内容を持つことになるわけですね。そういうふうに考えていくと、人格というものは意識の内容なんだから、意識が３次元であったならば、人格も３次元という構造を持たなければならない。これがこの人格というものがどういう構造を持ってる世界かということを考える場合の学問的な道筋であります。そして、人格の構造というものを３次元という構造を持つものとして考えた場合、どういうふうな３次元のこの構造として考えたらよいのかということになってくるわけすけども、具体的には、人類がこれまで歴史の中でさまざまにこの人間性を表現してきました。**

**なかなか深いことを言うなとか、度量が大きいなとか、あるいは、高尚な趣味を持ってるとか、高潔なる人物とか、そういうふうなことをいろいろ総合して考えていくと、人格の世界というものは、高さ、深さ、大きさという３つの次元を持って、この存在するものだということが、わかってくるわけであります。人格の世界というのは、高さ、深さ、大きさという３つの領域がある。人格には、高さという魅力と、深さという魅力と、大きさという魅力がある。そういうふうに、考えることができるわけですね。**

**そこで今日は、その人格の３つの次元の中の第１番目である、この人格の高さという世界はどういう世界なのか。自分自身が人格の高さというものを持った、いわゆる高貴なる精神というか、人間として尊ばれるような、そういう人間として尊敬されるような、高貴なる精神というものを持って、仕事をしていく。そういうふうなことになるためには、どういうふうな努力をすればよいのか。人格の高さはどうすれば獲得できるのか。そのことを、考えていきたいと思います。そこで、人格の高さをつくるための、まずは具体的な実践的原理という観点から考えていきたいと思います。私の哲学は感性論哲学というように言うわけですけど、感性論哲学というのは、理屈で、理性で、物事を考えていくという、そういうやり方をする哲学じゃなくって、われわれの感性の実感、本音というものを原理として大事にしてると。その本音と実感というものを、どういうふうに理性を手段能力に使って表現していくかというやり方で考えていくのが、感性論哲学の思考方法というふうに言うことができるものです。**

**そこで人格の高さとはいったいなんなのかということを考える場合も、理屈で考えていくんじゃなくって、われわれがいったいどういう人に具体的に人格の高さを感じるだろうかということ。自分のそういう感性の実感というものを思い出してもらいたいんですね。どういう人にわれわれは人格の高さというものを感じるだろうか。どういう人をわれわれは人格が高いというふうに言うだろうか。そのことを思い出してもらいたいと思います。そうすると、どういうことがわかってくるかというと、大人は子どもに対して人格の高さを感じることはありません。子どもでも、なかなか深いことを言う子はおりますし、また子どもでも心の広い子はおるんですけど、子どもには人格の高い子はいません。それから、また先進国の教育レベルの高い、教養のある方々が、後進国の教育を受けていない人たちに対して人格の高さを感じることはありません。教育を受けてない方でも、なかなか深いことをおっしゃる方はいらっしゃるし、また心の広い人はおりますけども、だけども、教育を受けていない人には人格の高さというものを感じることはありません。そういうことを、いろいろ考えていくと、この人格の高さというものは、その人が持っておる知識や技術や教養の量に関係してくるということが、おぼろげながら見えてくるわけであります。**

**そういうことから、人格の高さというものは、その人が生まれてから今日までに獲得してきた知識や技術や教養の量に関係しておるという捉え方がまずできるわけですね。人格の高さというものは、その人が生まれてから今日までに獲得してきた知識や技術や教養の量に関係してると。関係すると言うことはどういうことなのかといったら、たくさん知識を持っておったら人格は高いのかといったら、そうではないんだ。だけども、人格が高いという評価、高貴なる精神という、そういう高貴なる精神というのは高く貴いと書くわけですけど、高貴なる精神の持ち主だと、こう言われるような、そういうこの魅力を、その命にたたえるという状況になるためには、他人よりもより多くの知識や技術や教養というものを持っていなかったならば、その人は高貴なる精神の持ち主というふうに言われることはない。だけども、たくさん知識を持っておったら人格が高いか、高貴なる精神かといったら、そういうわけではないんだ。東大に入る人がみんな人格が高いというわけじゃない。だけども、人格が高いというふうに言われるためには、必要条件として他人よりもより多くの知識や技術や教養というものを持っていなければならない。これは必要条件だ。だけど、それだけでは、まだ十分条件ではない。それだけでは、まだ本当に人格が高いと言われる結果が出るとは限らないということですね。**

**では、人格の高さというものを決定する要因とはなんなのか。すなわち人格の高さを決定する十分条件とはなんなのか。そのことを次に考えていかなければなりません。この十分条件というものは、どういうふうにして導き出すことができるのかというと、十分条件というものは必要条件。これだけは絶対に基本的になきゃならんという、必要条件が成り立つ根拠を探究していくと、そこから十分条件が出てくるというのが、学問的な物事の考え方の方法論であります。そこで、他人よりもたくさんの知識や技術や教養というものを持っておったならば、人格が高いというふうに言われるための必要条件を自分が整えておることになるということから、十分条件を考えていくとどうなるかといったら、その知識や技術や教養というふうにこういわれるものは、いったいどういうふうにして増えていくのかということを考えていく。それが知識や技術や教養という必要条件が成り立つ根拠を追求することによって十分条件を導き出そうとする方法論であります。どういうふうにして知識が増えるのかといったら、具体的には、やっぱり学校に行って勉強して、そして、学年が進むにしたがって、だんだんと知識や技術や教養が増えていくという、かたちになるわけであります。**

**じゃあ、教育とはなんなのか。学校教育とはなんなのかということを考えていくと、この学校教育というのは、子どもたちにたくさんの知識や技術を与えることを最終的な目標にしておるのではなくって、学校教育というのは、人間をつくる、人間らしい人間をつくるということを、究極の目標にしておる。そのための手段として、学校はより高度で、より厳密な知識や技術を、学年が進むにしたがって少しずつ与えていくという、そういうこの作業をしておるのであるということになるわけですね。いわゆる教育の目的は人間をつくるということであって、決して知識や技術や教養をたくさん与えるということではない。だけど、現実の学校はどうかといったら、では結果として子どもたちにより高度で、より厳密な知識や技術や教養を与えることをもって教育と、しておるというふうに、言わざるを得ません。ということは、実際問題、この今の学校というのは、人間らしい人間をつくるということに失敗をしております。頭のいい、知識や技術や教養を持った、そういう子どもたちをつくることはできても、今の学校は、人間らしい心を持った人間をつくるということに失敗をしております。ということは、今の学校における教育のシステムというものは、決して人間らしい人間をつくるという、そういうこの状態になっていない。ただ単に知識や技術や教養を増やすことをもって、教育と考えるというふうなそういう状況にこの終わってしまっておるのが現実であります。**

**だけども、本来、教育というものは人間をつくる、人間らしい人間をつくるというところにその究極の目標があるというふうに、いわれておるわけですね。とするならば、この子どもたちにより高度で、より厳密な知識や技術や教養を与えるという、この教育の作業がどういうふうにしてこの究極の目標である、人間らしい人間をつくるということに関係するのか。そのことをちゃんと考えなければなりません。どういうふうに関係するかということなんですけど、子どもたちにより高度で、より厳密な知識や技術を与えるというこの作業が、子どもたちの心の中にどこまでもより高度なものを求めていきたい、どこまでもより厳密なものを求めていきたい、どこまでもより真実なるものを求めていきたい、どこまでもより美しいものを求めていきたい、どこまでもよりよいものを求めていきたいというふうな、そういう価値への欲求、価値への情熱というものを子どもたちの心の中に呼び覚ますことができたとき、それが人間教育ができたというふうに言うことができるわけであります。だけど、現実には、残念ながら、そういうこの人間の命の本質である感性の中に、価値への欲求、価値への情熱というものを呼び覚ますことができなかったならば、人間教育ではないんだということを、大学の教育学部の教授でも知らないんですよ。というのは、その近代の人間観というのは、人間の本質は理性だと考えてましたからね。現在でもそういうふうに考えて教育は行われてるわけですけども、その人間の本質は理性なんだ。だから、理性を成長させたら、人間、立派になるんだというね、そういうふうな考え方のもとで、今の教育は行われておるわけであります。だけども、もはや教育の現状を超えて、時代は、人間の本質は理性じゃない、心だというふうに言い始めておる。多くの人たちが、理屈じゃない、心が欲しいと叫んでおる。人間の本質は心だというふうにね、言われる時代になってきた。だけども、残念ながら、学校教育は理性しか成長させてくれない。心が成長するためにどんなことをしたらいいのかということをちゃんと考えた教科がないんですよ。心を成長させるための教科がない。時間がないんですよ。小学校から大学、大学院に行っても、心を育てるための授業というのはどこでもやってません。ただ知識や技術や教養をより高度に身に付けるという、そういう作業しか現実的には学校でやっていません。**

**だから、結果としては、頭のいいけだものができて、人間性が破壊されて、心の喪失という、そういう状態に陥って、血の通った温かな心を持ったいろんなことへの対応というものができにくい人間がどんどんできてきてしまっておる。だから、本当に人間らしい心を持った子どもたちは、学校に行くことが恐ろしい。学校に行ったら、俺は人間でなくなってしまう。学校に行ったら、俺の心は破壊されるんだ。そういうふうに、命は感じて、そして登校拒否に陥るわけですね。学校に行けば、理性は成長するけど、心は死ぬんだ。人間の本質が心であったならば、俺は殺されるんだ。そういう思いでですね、子どもたちはどんどん、どんどん、学校から離れていって、不登校児になって、自閉症児になって、そして、いわゆる、落後者みたいな、烙印を押されてしまう。だけども、今、全国には、そういう自閉症児や不登校児だけを扱って教育をしてる学校がどんどん増えております。そして、そういうこの自閉症児や不登校児を集めた学校では、君たちこそ、新しい時代をつくる、このかけがえのない戦士だと。君たちこそ、心の時代を担う、かけがえのない、この人間なんだと言って、彼らを教育して、そして、その学校では得られなかった人間性の豊かさや、血の通った温かな心とはなんなのかということを教えて、そして、心を成長させる。理性を成長させるんじゃなくって、心を成長させるための教育をそういうところでやっておるわけであります。とにかく、この学校教育の究極の目的というのは、人間らしい人間をつくるということなんだ。**

**ところが、近代社会のね、近代の人間観というのは、人間の本質は理性だと考えてましたから、だから、人間らしい人間をつくるということは、理性を成長させることなんだというふうに思ってしまって、理性教育をし、知育偏重の教育をしてきてしまった。その結果として、人間性の破壊、心の喪失、血の通った温かな心が人間から奪われてしまうという、そういう状況に今、陥っておるわけであります。それはどこに間違いがあったのかといったら、その理性を育てても、心は育たないと。理性を成長させるということは、残念ながら、人間性を破壊することである。そのことに今、ようやくこの多くの人たちが気付き始めておる。だけど、今の学校はまだまだ理性教育だけしかやっていない。**

**じゃあ、どういうふうにすれば人間教育、人間らしい心を持った人間を成長させるという教育ができるのかといったら、人間というのは理性を持っていますから、たくさんの知識や情報というものを獲得することも大事な、人生を生きるための目標ですので、それも大事なんだけど、より高度な知識や技術というものを獲得していくことが、どういうふうに人間性を成長させ、心を成長させ、人間らしい人間をつくるということに関係するのかということを、ちゃんとわからないと、人間教育はできないということなんですね。どう関係するのかといったら、より高度な知識や技術を子どもたちに与えるということが、その目的だけで終わらないで、より高度な知識や技術を子どもたちに与えるという作業を通して、子どもたちの心の中に、どこまでもより、高度なものを求めていきたいんだ。どこまでも俺はより厳密なものを求めていきたいんだ。どこまでも俺は、より真実なるものを求めていきたいんだ。どこまでも俺は、より美しいもの、よりよいものを求めていきたいんだという価値への情熱、価値への欲求をその子どもたちの心に呼び覚まし、植え付けることができたとき、初めてそれは人間教育となったというふうに、言うことができるわけであります。**

**決して高度な知識や技術を与えることは間違いじゃないんですよ。人間教育のためには、どうしても人間は理性という能力を持っておって、たくさんの知識を獲得して、この豊かな文化、文明をつくるということをしていかなきゃなりませんから、知識や技術や教養を増やしていくことは大事な人間教育です。だけど、知識や技術や教養を増やすだけで教育が終わってしまったら、それは理性教育であって、人間教育じゃないんだ。この理性教育というものが、どういうふうにすれば人間教育に関わっていくのかということを、ちゃんと知る必要があるわけであります。たくさんの知識や技術を子どもたちに与えるという、その作業を通して、子どもたちの心の中にどこまでもより高度なもの、厳密なものを求めていきたい。どこまでもより真実なるもの、より美しいもの、より善なるものを求めていきたい。そういう価値への情熱、価値への欲求を子どもたちの心に植え付けたとき、その教育は人間教育として成功したというふうに言うことができるわけであります。**

**実際問題、社員教育を考えても、全社員がどこまでもより厳密なものを追求したい、どこまでもより高度なものを追求していきたい、どこまでもより真実なるもの、どこまでもより美しいもの、どこまでもよりよいものを俺は求めていきたいんだという、価値への情熱を全社員が持ったならば、どんなに素晴らしい会社ができるか、どんなに素晴らしい仕事ができるか、どんなに素晴らしい作品ができるか、そのことを考えてみてもらいたい。知識や技術や教養を持っただけでは、その知識に支配されて、その知識の範囲での仕事しかできない。だけども、その知識を獲得する努力を通して、どこまでもより高度なものを求めていきたい、どこまでも厳密なものを求めていきたい、どこまでもより真実なるもの、どこまでもより善なるもの、より美しいものを求めていきたい、そういう気持ちを全社員が持ったならば、本当に人間らしい心を持ったならば、どんなに素晴らしい会社ができ、どんなに素晴らしい感動的な仕事ができ、どんなに素晴らしい建築商品が提供できるか。そのことを考えてみてもらいたい。これが高貴なる精神、人格の高さというものを、つくるためのこの方法論であります。**

**知識や技術や教養を社員に、子どもたちに与えることは間違いではない。それはどうしてもしなければならないことなんだ。文明、文化の中で生きる人間にとっては、どうしても知識や技術や教養は大事だ。だが、それだけで終わってしまったなら理性教育になる。それを人間教育にまで深め、人間教育にまで到達しようと思ったら、どうしたらいいのかといったら、この教える側においても、より高度な知識を社員に、あるいは、子どもたちに与えるということは、子どもたちの心の中に、社員の心の中に、どこまでもより高度なものを俺は求めていきたいんだという、そういう高度なものを獲得することの喜び、より高度なものを獲得することの素晴らしさ、醍醐味というものを、社員や子どもたちの心に感じさせて、そして、子どもたち自身がより高度なものを求めていきたいということを喜びとする。そういうふうな結果ができたとき、それは人間教育になったというふうに言うことができるものです。ということはなんなのかといったら、人格の高さというものを、最終的に決定する十分条件とはなんなのか。それは価値への情熱である。価値への欲求である。どこまでも俺はより高度なもの、より厳密なもの、より真なるもの、より善なるもの、より美しいものを求めていきたい。そういう気持ちを、持ったとき、それこそまさに高貴なる精神そのものだ。より高度なものを求めていきたいというのが高貴なる精神なんだ。それが人格の高さなんだ。たくさんの知識を持ってるというのは結果なんだ。たくさんの知識を持っておっても、より高度なものをどこまでも求めていきたいという価値への情熱がなければ、その人間に人格の高さはない。だから、たくさんの知識を持っておるからといって、人格が高いわけじゃないということですね。本当に人格が高いというふうに尊敬されて、他人から魅力を感じてもらうような、そういう人間性、人格というものを獲得しようと思ったならば、われわれはたくさんの知識を獲得するための根底にある原理である、どこまでもより高度なもの、厳密なものを求めていきたい。どこまでもより真なるもの、善なるもの、より美しいものを求めていきたい。そういう欲求をですね、自分の中につくり出す。そういう気持ちを自分が持って仕事をし、生きるという、状態に自分をしていかなかったならば、その人の人格には高貴なる精神という輝きはないというふうに、言うことができるわけです。**

**なぜどこまでもより高度なもの、厳密なるものを求めていきたいという価値への情熱が人間らしい人間をつくったということになるのか。人間の本質である心、人間の本質である心というのはなんなのか。人間らしい心というのは、意味と価値を感じる感性だ。人間における感性というのは、意味と価値を感じるという感性にまで進化し、成長してきた感性を人間は持っておる。それが心といわれるものであります。心とは、意味と価値を感じる感性だ。だから、心は意味と価値を感じる感性だから、どこまでもより高度なものを求めていきたい。どこまでもより厳密なものを求めていきたいという価値への情熱を持ったとき、人間らしい心ができたというふうに、言うことができるわけであります。これは、教える側において、そのことを心得ておらなければならないだけではなくって、学ぶほう、いわゆる子どもたちも、また社員教育を受ける社員の方々も、自分がより高度な知識や技術をこの習得させられる努力を自分がしておるということは、俺の中にどこまでもより高度なもの、厳密なるものを求めていきたいという価値への情熱を自分の中につくるために、その作業を自分はしてるんだということを、自覚して学ばなければならない。でないと、この高貴なる精神というものは命に宿らない。**

**教える側においても、教えられる側においても、より高度な知識を求めていくということは、命の中にどこまでもより高度なものを求めていきたいという価値への情熱を呼び覚ますために、そのことは行われておるんだということを意識しながら、より高度な知識や技術を学ばなければならないということです。そして、より高度なものを手に入れることの喜び、素晴らしさ、醍醐味というものを感じたとき、初めてその人は、高貴なる精神という人格を持ったというふうに、言うことができるわけですね。これは社員教育においてものすごく大事な課題です。社員に単なる知識や技術や教養を与えるだけでは、それは理性教育であって、人間教育ではありません。本当に社員、全社員がお客さんに、人間としての心を持って対し、仕事をするという状況をつくろうと思ったならば、社員教育はこの高貴なる精神を社員の命に宿らせることを目標にしてなされなければなりません。**

**そういう価値への情熱、価値への欲求というものを、子どもたちが、社員が持ってくれたならば、もう教えなくっても、自分の心の中により高度なものを求めていきたいというような、そういう欲求はあるんですから、放っておいても、自分自身でもより高度なもの、厳密なものを獲得することの喜びや醍醐味を感じて、自ら勉強して、自ら自分に必要なもの、自分の仕事に必要なものをどんどん、どんどん、この飽くなき欲求を持って求めていくという、そういう生き方をし始めます。もうそしたら、放っておいても、もう素晴らしい人間になってしまう。その意味で、いかにこの人間にとって、価値への情熱、価値への欲求というものが大事なのかということを、ぜひわかってもらいたいし、また皆さん方が結婚されて、子どもができたならば、子どもを育てる、子どもを人間らしい人間に育てるとはどういうことなのかということをちゃんとわかって育ててもらいたい。**

**子どもを人間にするということはどういうことなのか。それは子どもの心の中にどこまでもより高度なもの、厳密なもの、どこまでもより真実なるもの、どこまでもより善なるもの、より美しいものを俺は求めていきたいという心を子どもの命に宿らせることが、子どもを人間として育てるということの、目標であります。それを忘れたら、子どもは人の皮を着たけだものになってしまう。それは極端な言い方ですけど、そういうふうな傾向性は出てきますよ。犬猫ではない、人間としての人格の誇りはどこにあるのか。それは、どこまでもより高度なもの、厳密なもの、どこまでもより真なるもの、善なるもの、より美しいものを求めていきたい。そういう価値への情熱、価値への欲求を持って生きるところに、人間としての誇りがある。人間としての素晴らしさがある。人間としての命の輝きがあるんだ。ですから、皆さん方も、ぜひそのことをわかってもらって、そして、本当に俺はどこまでもより高度なもの、厳密なものを求めていきたいという価値への情熱を持って仕事をしておるのか。本当に俺の命の中に、このどこまでもより高度なもの、厳密なものを求めていきたい。どこまでもより真なるもの、善なるもの、より美しいものを求めていきたいという、そういうこの欲求を持って俺は生きておるのか。そのことを自分に問うてもらいたい。**

**本当にわれわれが、人格の高さというものを、自分のものにし、高貴なる精神というものを持って、人間としての命を輝かせて生きていきたいと思うならば、本当にこの俺の命の中に、この価値への情熱が燃え盛っておるのか。そのことを自分に問わなければなりません。この価値への情熱なしには、人間に人間の格があるとは言えない。人間が人間として素晴らしい人生を生き、素晴らしい仕事をしていこうと思ったら、どうしてもこれが必要なんですよ。どこまでもより高度なもの、厳密なものを求めていきたい。そういう気持ちを持って、仕事をすること。それができたなら、どんなに素晴らしい仕事ができるか。どこまでもより真なるもの、善なるもの、より美しいものを俺は求めていきたいんだ。そういう気持ちを持って人生を生きたならば、人生はどれほど素晴らしいものになるか。人間教育の究極の目標はそこにあるわけであります。そして、そういうこの欲求を持ったならば、もう放っておいても、知識や技術や教養は、どんどん、どんどん、増えざるを得ない。結果として人格の高さが生まれてくる。そういう状態になるわけですね。**

**そして、真善美を求める。人間は昔から真善美という価値を追求するという活動をしてきましたけども、真善美を求める、その活動が、人間に品格をつくるという、そういう働きをするわけであります。人間に品格をつくる。人間の品格をつくるためには、真善美を求めていかなければならないと。どこまでもより真なるもの、より善なるもの、より美しいものを求めていくという、その生き方が、その活動が、命に品格をつくるんですね。人間の格としての品格をつくる。そういうふうに考えていくと、この人格の高さをつくるための必要条件は知識や技術や教養ですけど、結果的には、それは価値への情熱というですね、この十分条件を獲得した結果として出てくるものであって、知識や技術や教養を増やすこと自体を目的にしてはならないと。目標にしなければならないのは、自分の命の中にどこまでもより高度なもの、厳密なものを求めていきたい。どこまでもより真なるもの、善なるもの、より美しいものを自分は求めていきたいんだという、価値への情熱を自分の心に植え付ける、呼び覚ます。そのことが、この人間としての人格の高さというもの、高貴なる精神というものを自分がものにするための、根本の目標である。**

**残念ながら、今の教育の中にはですね、こういう自覚がありません。これは感性というものを、正確に理解する哲学がないと、このことはわからないんですよ。理性ではわからないんですよ。人間の本質は感性だ。命の本質は感性だ。そのことをちゃんと捉えた哲学でしか、今、申し上げたような結論を導き出すことはできません。だから、残念ながら、全世界、どの大学の教育学の先生も、今、私が申し上げてることを知らないんですよ。知らないで人間教育をしてるんですよ。すなわち、まだ誰も人格とはなんなのかを知らないんですよ。だから、全世界の学校の教科書を全部集めても、人間の格とはなんなのかということを書いてある本がないんですよ。本がない。教科書がないんですよ。そういう知識がないんですよ。人格とはなんなのか。人間の格とはなんなのかを知らないで、今、学校教育をなされておるんです。だから、物質的に豊かになっても、人間性はどんどん、どんどん、その品格をなくしていって、人間性は堕落してる。そういう状況がこの生まれてくるわけですね。**

**だけども、これは人間教育というものが始まって、日が浅いというか、せいぜい200年程度ですから、だから、まだまだこれから教育学は発展していって、そして、文化、文明というものを教示しながら、人間らしく生きていくためにはどうしても知識や技術や教養を増やしていかなければならない。これは決して間違いではない。だけど、それが、ただ知識や技術や教養というものを増やすことだけで終わってしまわないで、それがさらに本当の人間らしい心をつくる。人間らしいこの人間をつくるということに関係していくためには、どういうことを考えながら教育はなされなければならないのかということを、これから人類は探究していって、知ることになるわけですよね。これは感性論哲学でしか言えてない、この教育の理想であります。人間をつくるということは、人間の心の中に価値への情熱を植え付けることだということは、感性論哲学でしかまだ言えてない。世界中、どんな本を読んでもらっても、そのことは書いてありません。しかも人間の心とはなんなのかということも誰も知らないんですよ、まだ。だから、国語辞典を引いてもらって、心と引いてもね、心とは、意味と価値を感じる感性だというようなことはどこも書いてありません。まだまだ、そういう意味では、人間は、人間とはなんなのかということを、十分には理解していないというふうに言って過言ではありません。**

**ようやく人類は、人間の本質は理性じゃない。人間の本質は心だということをようやく知り始めてきたというね、今そういう、段階ですからね。だけど、まだ世界は人間の本質を理性と考えて、理性を成長させる教育をやってるわけですから、まだまだ本格的には人間らしい人間とはなんなのかというようなことに人類は目覚めていないというふうに、言って過言ではありません。実際問題、これまでの人類の教育ということをいろいろ考えてみると、この人類は、人間でありながら、この古代においては強大な力に憧れ、中世においては神や仏に憧れ、近代においては理性に憧れて、人間でありながら、人間らしい人間になろうとしたことは一度もなかったんですよ。これまでは残念ながら、人類は人間でありながら、人間ではないものに憧れて、人間ではないものになろうとするようなね、そういう間違った生き方をしてきました。だけど、それは今から言えば、間違ったと言えるんですけども、だけど、そういう間違った道筋を歩むことによって、本当はどうしなきゃならんのかということがだんだん見えてきてるので、これは間違ってると言えるんじゃなくって、本当のことに気付くためのプロセス、道筋だったんだというふうに、考えることが、正当であります。ようやく人類は、いろんな他のものに憧れるという、ことを通して、ようやく本当の自分に目覚めるという、そういう段階を迎えておるんだということです。**

**脳生理学という観点から言ったならば、人間はまだ人類として自我に目覚める以前の段階にあるんだというふうに、言うことができるんですね。これは、この人間が持って生まれてる潜在能力というものを100と考えれば、まだ人類は持って生まれた、生まれながらに与えられた能力の約１割強しかね、この顕現させていない、使っていないというふうにいわれておりまして、８割強もまだ人類は命に与えられてる能力を使っていないんですね。ということは、命に与えられておる潜在能力というものを100％表現したときに、初めて人間として完成された姿というものが見えてくるというふうに、考えることができるならば、まだ人類はその１割強しか表現していないということは、年齢的にいったら、人類の年齢は12～13歳、まだこれから自我に目覚めようかという、そういう段階にあるというふうに言うことができるわけです。**

**だけど、ようやく、今、人類は、人間でありながら、他の者に憧れることの間違いに気付いて、そして、この人間らしく生きる、人間らしいとはどういうことなのかということにようやく気付き始めてるという、そういう段階であります。すなわち、その母なる宇宙によって、人間として生んでいただきながら、人類は、古代においては強大な力に憧れ、中世においては神仏に憧れ、近代においては理性に憧れて、なんでお母さん、人間なんかに生んでくれたんや、俺は強大な力を持った存在になりたかった、俺は神仏のような存在になりたかった、俺は理性のような完全な存在になりたかった、なんでこんな不完全な人間なんかに生んでくれたんやと言って、その人間に生んでいただきながら、生んでくれた母なる宇宙に不平不満、文句を言いながらね、生きてきた。そういう状況がこれまでの人類史でした。だけど、ようやくその間違いに気付いて、これからようやく人類は、お母さん、よくぞ人間として生んでくれました。われわれはこれから人間として生んでいただいたことに感謝しながら、人間であることに誇りを持って生きていきますという、そういう段階にこれから入るわけであります。**

**ようやくこれから人類は本当の人間教育とはなんなのかということを知って、そして、その結果を出すための教育をこれから始めていくんだという、そういう段階にこれから入るわけです。だけど、まだそれは誰もやっておりません。これからやるんです。ようやく人類は、人間の本質は理性じゃない。心だということに、気付き始めたという、そういう段階に今、到達したわけなので、これから心を本質とする人間というものをつくっていくためには、どういう教育の仕方をしたらよいのか。そのことを、これから人類は考えていくことになってくる。そして、全世界の学校の教科書にね、人間性とはなんなのか、人格とはなんなのか、心とはなんなのかがちゃんと書いてあって、そして、そのことを子どもたちに教えながら、本当に人間らしい、血の通った温かな心を持った人間をつくるという、教育がこれから始まるわけであります。それが始まれば、多分、戦争はなくなる方向性に人類は活動し始めるというふうに思います。だけど、まだまだ今は、そういうこの血の通った温かな心をつくる教育がどうしたらできるのかを知りませんから、理性だけの教育をやってますから、だから、考え方の違いで、宗教の違いで殺し合うんです。本当にこれからわれわれは、血の通った温かな心を持った本当の人間をつくるという教育にこれから旅立つんだと。そういうこの状態に今、人類はあるわけなんですね。**

**そういう意味で、どうぞ皆さん方も、この自分自身が本当に血の通った温かな心を持った人間として生きるためには、自分の中にどこまでもより高度なもの、厳密なものを求めていきたい。どこまでもより真実なるもの、どこまでもより善なるもの、どこまでもより美しいものを求めていきたいんだという価値への情熱、価値への欲求を自分の命の中につくらなければ、俺は人間じゃないんだということを、ぜひ肝に銘じて理解しておいてもらいたいと思います。そういう心を自分が持つことに目標を置いて努力してもらいたい。そうしないと、今の人類は、もう一段階、高いレベルに、人間性を進化させることはできません。そして、今よりも、より素晴らしい生き方をするためには、どうしてもそのことが必要なんです。離婚の激増を食い止め、幼児の虐待を防ぎ、高齢者の虐待を防ぎ、そして、違いを理由に殺し合うという戦争をなくしていくという、そういうこの血の通った温かな心を持った生き方ができてくるためには、どうしてもこの価値への情熱を命に宿らさなければなりません。**

**人格の高さというと、あまり常識的にはイメージしにくいような、そういうこの領域なんですけども、人格の高さというのは、具体的には価値への情熱、価値への欲求というね、そういうものであって、その結果としてつくられてくるものが、高貴なる精神という、高く貴い精神、それが人格の高さというものの具体的な内容であります。高貴なる精神。そして、人間の心というものが、意味と価値を感じる感性であるが故に、この価値への情熱、価値への欲求を持ったとき、われわれは本当に人間らしい、血の通った温かな心を持って、いろんなことができるという、そういう状態に成長することができます。それが人間として生きるということの、非常に大事な原理です。だから、人間であるならば、俺は人間だと思っておるのであるならば、自分は人間だと思っておるのであるならば、その人間としての生き方の基本原理である、価値への情熱、価値への欲求が本当に俺の中にあるのかということを、ぜひ自分自身に問うてもらいたい。本当に俺はどこまでもより高度なものを求めていきたいと思っておるのか。本当に俺はどこまでもより厳密なものを求めていきたいと思って仕事をしておるのか。そういう精神を持って仕事をし、お客さんに接しておるのか。本当に俺はどこまでもより真実なるものを追究したいと思って生きておるのか。また本当に自分は、どこまでもより善なるもの、よりよいもの、より美しいものを求めていきたいという思いを持って、この生き、生活し、仕事をしておるのか。そのことを自分に問うてもらいたい。それがなかったならば、残念ながら、その人間は理性であって、人間ではない。人間らしい生き方をしていないというふうに、言うことができるわけであります。**

**これから、量から質へとあらゆるものの成長の目的が変わっていく。その質の向上というか、そういう質の向上という観点から考えたならば、会社の質を向上し、人間の質を向上させていく。また仕事の質を向上させていくという意味においても、高貴なる精神というものを命に宿らせることは、かけがえのない自由な原理です。毎日毎日の自分の生活や仕事の中で、ぜひこの自分自身がどこまでもより高度なもの、厳密なものを求めていきたい、どこまでもより真なるもの、善なるもの、より美しいものを求めていきたいという、この欲求と思いを持って、自分が仕事をし、生きておるのか、そのことを常に自分の命に問い掛けながら、仕事をし、生きてもらいたい。それが結果としては、自分を幸せにし、また素晴らしい仕事をして、大成功の人生を獲得できるための根本の原理なんですよ。本当に成功と幸せを獲得したいと思うならば、この価値への情熱、価値への欲求は根本の原理です。**

**残念ながら、どの会社でもそうですがほとんどの仕事が、ただ仕事があるからやってるというだけの惰性に流されてしまっておって、本当に自分自身がそういう価値への情熱を持って仕事に取り組んでるという姿は、残念ながらあまり見受けられません。言われたことを、言われてるままにやってる。それで十分だというふうな、そういうふうな感じでしか働いていない。そういう人が非常に多いです。中には、その仕事の素晴らしさに目覚めて、その仕事に喜びを感じながら、価値ある生き方をしてる方もいらっしゃいますけども、非常に少ないです。ほとんどの方々は、惰性に流されてしまっておる。今、自分のやってる仕事にどういう意味や価値があるのか。なぜ自分は今、この仕事をしなければならないのか。今、自分がこの仕事をしなければ、会社全体はどうなるのか。自分が今、この仕事をするということが、会社全体から見て、どういうふうな値打ちがあるのか、どういう価値があるのか。そのことを、われわれは自分自身でちゃんと考えながら、今の自分に与えられた仕事をするという姿勢を持っていなければなりません。**

**また上司が部下に仕事を与える場合でも、ただ命令するんじゃなくって、なぜ君にこの仕事をしてもらいたいのか。君がこの仕事をしてくれるということが、会社全体にとってどういうこの意味や価値や値打ちがあるのか。そのことをちゃんと部下にわからせて、仕事をしてもらうという、そういう仕事のさせ方をしなければなりません。そして、その命令された部下のほうも、自分がその仕事をしなかったならば、会社はどうなるのか。自分が今、その仕事をすることが、どういうふうに会社の収益、利益に関係しておるのか。そのことをちゃんと自分が考えて、そして、その仕事の重要性というものを自分が知りながら、その仕事をするという、そういう精神を養ってもらわないといけません。**

**とにかく人間の心は、意味と価値を感じる感性ですから、意味を感じないで何かをしてるということは、意味のないことをしてるんだ。価値を感じないで何かをするということは、価値のない人生を生きてるんだ。それでは人間ではない。人間は常に何事をする場合でも、今、自分のやってることの意味と価値と値打ちと素晴らしさというものを、自分が知って、また感じながら、それをするということが大事です。感じなければ、人間は行動しませんからね。知っただけでは行動しませんから、感じることが大事だ。感じてこそ人生、燃えてこそ人生、命から湧いてくるものがあってこその人生。だから、命から価値への情熱が湧いてくる。命から価値への欲求が湧いてくる。それで初めて本物の人間だ。人間としての命の素晴らしさがそこから出てくる。知識や技術も大事ですけど、それ、もっと大事なのは、意味や価値を感じるという、この心が、ものすごく人間にとっては大事な課題だということなんですよね。とにかくこの人格の高さという、そういうこの高貴なる精神というものを自分のものにする努力というものが、結果として自分の人生に生きがいや、生きる喜びや、この仕事の能力における成長や、会社の発展に直結していく、重要な課題だということを、理解しておいてもらいたい。**

**一般的な、人物評価という面においても、深さとか、人間の大きさということについて書いてあるようなものはたくさんあるんですけど、この人格の高さとか、高貴なる精神という、そういうこのことについての、理解とか、そういうこの説明が書いてあるような、そういう書物は非常に少ないです。よくいろんな人物の、その人格の素晴らしさについて書いてあるような本がたくさん、出ておりますけど、人格の高さというものをこの表現するというか、ちゃんと考えて、その人物の素晴らしさを説いてある、書いてある、そういう本は非常に少ないです。そういう意味では、人格の高さとはなんなのか、非常に一般的な意識としてわかりにくい、そういう人格の内容じゃないかと思うんですよ。深いと言うことは、『美味しんぼ』なんかでも、深いとよく書いてありますしね。漫画なんかでも、そういうこの深いということはいろいろ出てくるし、また器が大きいとか、度量が大きいとか、包容力があるとかいうことで、人物の大きさというようなことについては、いろいろと書いてあるものもあるんですけども、この人格の高さというものがどういうものなのかということについて、書いてある本は、非常にこの少ないというか、あまり目に付きません。だけど、これはものすごく人間としての生き方を質において、成長させていくためには、非常に大事なこれは課題であります。**

**こういう人格の高さを求めていくということは、人格を磨くという、そういう段階の話なんですよね。だけど、最初に申し上げたように、この人格というのは、人格を磨くという段階に入るまでに人格をつくるという段階があるわけですよね。だから、人格をつくるという段階をちゃんと踏まえていないと、この人格を磨くという段階の努力が砂上の楼閣と化するということになってしまって、根拠、ちゃんとした土台ができません。そういう意味で、努力の積み重ねというか、人間として自分を成長させる努力の仕方として、まず基本的には、人格の高さをつくる以前に、謙虚さと成長意欲と愛、この３つを自分の人間としての生き方の基本においた努力というものをしなければなりません。どうすれば自分の命から謙虚さがにじみ出てくるのか。自分は本当に人間としてもっともっと成長したいという、成長意欲を持って、生き、仕事をしておるのか。本当に自分は人の役に立つ人間になりたい。人の役に立つことを喜びとする感性、心を持って、生きておるのか。そのことを自分に問うて、本当に自分はこの人間への愛というものを、持って仕事をし、お客さんに対しておるのか。そのことをまず自分に問わないと、それなしに人格の高さを磨くというようなことをしても、それは残念ながら、この本当に血の通った温かな心というものをつくり出す、そういう結果には至りません。**

**価値への情熱の根底に常にその３つの、人格をつくるための３つの条件というものをちゃんと心得ていないと、人格の高さというものも本当には意味を成さないという、ことになってくることになるんじゃないかと思います。その意味で、この人格というものの成り立ちと、その構造というものを、ちゃんと理解したうえで、今、申し上げた人格の高さとはなんなのかということを、考えてみてもらいたいですね。とにかく、まず大事なのは、謙虚さと成長意欲と愛。この３つが根底になかったら、価値への情熱も意味を成さない。ということで、今はこの人格の高さをつくるための実践的原理を話したんですけど、休憩を入れてから、次は、人格の高さをつくるための精神的原理という、そういう観点からの話を付け加えてしたいと思います。**

**人間というのは、肉体を通した体験というものがないと、実力というのはできませんけども、だけども、その肉体的な体験だけでは、非常に幅が狭いです。そこで、その意識的な、精神的な面からの努力を加えることによって、自分が肉体的な体験で獲得したものが、広がりを持って、普遍性を持って、生きてくるという、そういうことになりますので、精神的な面からの意識的努力というものも非常に大事な要素なんですよね。体験的なものだけでは、体験には個の限界がある。それをさらに広げていって、そして、この多くの人から、あの人は人格が高いとこう言ってもらえるような、そういう普遍的な内容というものをつくっていこうと思ったら、意識的、精神的努力というものをしないといけない。高さというのも、俺は人格が高いぜという話のもんじゃなくって、あの人は人格が高いと言ってもらわないと、人格の高さはないのでね、その意味で、体験だけでは独り善がりなことになってしまいやすい。だから、独り善がりにならないで、多くの方から、人格が高いという評価を得ることができるという、そういう状態に持っていくためには、どうしても体験的な実践的原理だけじゃなくって、意識的な、精神的な面からの原理も心得て、それも取り入れていくという、ことをする必要があるわけであります。そういうことで、10分間休憩を入れてから、あと、人格の高さをつくる精神的原理という話をさせてもらいます。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、次の課題ですけど、今度は人格の高さをつくる精神的原理ですね。これには４項目ありまして、第１番目は、自信をつくるということなんですね。自信のない人間に人格の高さを感じることはありません。そういう意味で、この自信をつくるということは非常に大事な他人からの評価というものを得るための基本原理というふうに考える必要があります。人格の高さという観点から、自信をつくるという努力はどういう努力なのかということなんですけども、人格の高さというのは、知識や技術や教養というものに関係しておる。であるが故に、この自分が今、持っている知識や技術というものが、自分にとって何かしらこう、確信の持てないような不確かなものであったのでは、自分の命に自信というのは湧いてきません。自信というのは、これは命からじしーんと湧いてくるというような、そういうふうな構造になってるもんですから、自信が命からじしーんと湧いてくるというような、状態にこうなっていくためには、どういう努力をしたらよいのかということを考える必要があります。自分の持ってる知識、技術というものが、自分にとって根拠が明確ではない。ただ、教えられて知ってるというだけのことであって、根拠が明確でないと、本当の自分の自信、やる気、行動力というのは出てきません。これは心理学的に言うと、行動力がないとか、実践力がないという人のほとんどは、この自分が持ってる知識や技術の中に何かしら根拠が明確ではない、不確かなものがあるということが、この行動力、実践力が湧いてこないということの原因だというふうにいわれております。そういうことを考えると、この行動力、実践力という、そういうものをつくっていくためには、自分の持ってる知識や技術というものを本当に自分が根拠から明確にこの理解してるという、そういうふうなものにしていくということが、非常に大事な課題なんですね。やっぱり、不確かな知識というのは、何かしら、もしそれを聞かれたらどうしようかと思って、すぐ逃げ腰になりますしね。技術でも不確かだと、それをしろと言われたら困るので、なんとなくそれをしろと言われないように、逃げるというような、生き方になってしまいます。**

**本当に自信を持って生きていく、また他人から見ても、信頼できるという、そういうことになっていくためには、常にプロとして自分の持ってる知識や技術というものに明確な根拠をちゃんと理解しながら、自分の持ってる知識や技術を使うというふうな、そういう努力をする必要がある。この知識というものが、ちゃんと根拠からわかっておるということは、これはプロとしての、非常に大事な社会的責任というふうに言うことができるものであって、他人から信頼され、信用されるということになってくるためには、どうしても自分が仕事のうえで使う知識や技術というものが、素人から見て、さすがとこう言ってもらえるような、水準の知識や技術を持ってる必要がある。さすがと言ってもらえる知識や技術という、水準というのはその根拠が、ちゃんとわかっておるということが大事であります。**

**われわれは、日常、テレビを見ていますけども、なんで電波が映像になるのか、なんでその空中から飛んできたやつが画面で絵になるのかを、われわれ、知らないで、ただ結果としてテレビを見てるという、そういう状況なんですけども、そのプロというのは、なんでそれが、電波として発信すれば、それが受信機で受け止められて、そして、この映像として出てくるのかということがちゃんとわかっておってプロなんですよね。そういうことがちゃんとわかってないと、客にさすがと言わせる力がないわけですよね。プロというのは、自分の持ってる知識や技術というものを本当に根拠から明確にしていって、客から何か質問された場合でも、こうですとちゃんと答えることができる。そのことによって、さすがですねと言われて、感動を与えることができる。そういうことが大事なんですよね。プロというのは、さすがにプロですねと言われる水準の知識や技術を持っていなければならないし、またその自分の持ってる知識や技術というものは、根拠から明確にちゃんと理解できてるという状態の自分をこの維持するというか、そういう自分というものを常につくっていくための努力をする必要があります。自分の中にちょっとでも不確かなものを発見したならば、その自分の中にある不確かなものをいち早く、それを自分にとって確実なものと言えるものに転換していく努力というものを積み重ねないと、本当にプロとして自信を持った仕事をすることはできないと思います。**

**自信のない人間に人格の高さは感じないという、そういう感性の実感からするならば、自信をつくるためにどうするかということも非常に大事なこれは高貴なる精神というものを、つくっていくための大事な課題であります。自信というのは、これはやっぱり、他人から信頼され、信用されることによって、客観的というか、具体的な自信というのが湧いてくるということになりますので、他人から信頼され、信用されるために、自分がしなければならない努力。それが自信をつくるという、この努力、作業なんですよね。プロとしての自信というのは、客からさすがにプロですねと言ってもらえる、そういうこの仕事の水準というものを自分が獲得して、それを維持し続けるという努力ですね。それがこのプロとして自信を持った仕事ができるという、状態であると思います。**

**だけども、仕事というのは、非常に多岐にわたる。だから、なんでもかんでも、全部そういう根拠をちゃんと明確にして、この客にちゃんと説明できるという状態にしていこうと思ったら、これはあまりにも多くの知識量によって自分がつぶされてしまうという、ことになってしまいやすい。そういう意味からすると、自分が今、やっておる仕事の中でも、特にこのことに関しては、俺は絶対に自信があるという、領域を自分自身で決めて、そして、そのことに関しては誰にでも教えることができる、誰でも指導することができるというふうなものをつくっていくという努力をする必要が、プロとしてあるんじゃないかと思うんですね。あれもこれも全部、そういうさすがと言われる状況にしようと思ったら、やっぱりこれはちょっと無理です。自分が専門というふうに言うことができる領域を自分でつくってですね、この領域のことに関してはなんでも知ってる、なんでもできる。今、世界の最高水準のところまでですね、俺は知ってるんだ、できるんだという、そういうものをつくる努力をする必要があります。**

**そのためには、できるだけこの自分が専門と言える領域を狭めることですよね。狭い分野なら、簡単に今の世界の頂点と言えるところまでいけるんですよ。だけど、あれもこれも、全部それをやろうと思ったら、この努力がこう散漫というか、いろんなことをやっていけば、残念ながら、高さがなかなか、出てきにくいということになりますので、その意味では、このあれもこれもやるんじゃなくって、一点集中でですね、このことに関しては、俺は絶対、誰にも負けんというふうな、そういうものをですね、つくっていく。それを柱に自分が仕事をしていくということを考える必要がある。そして、自分がこの専門と言える領域をちょっとでも外れたならばですね、気軽に仲間に聞いたり、あるいは、それをよく知ってる専門家に聞いたりなんかして、教えてもらって、助けてもらって、共にチームを組んで仕事をしていくという状況をつくっていくことも大事なこれは情報化時代という中では大きな課題です。**

**あれもこれもやったんでは高さが出ない。自分の専門という領域をできるだけ狭く設定してね、このことに関しては、俺は今のこの世界の頂点のところまでわかってるんだというね、そういうものをつくっていくこと。これはやっぱり、客に対するですね、このプロとしての、責任というものじゃないかと思います。今、自分のやってる仕事の最高レベルを知らないで、最高レベルの仕事をしてるんじゃなくって、それよりも低い仕事をしてるということは、プロの恥ですよね。だから、このことに関しては、俺は今の世界の頂点のところまでわかってるんだ、できるんだ、やれるんだという、そういうものを全社員が目指す必要があります。そして、その自分が狭く設定した、その領域からちょっとでも外れれば、その領域において専門と言える能力を持ってる人に助けてもらって、教えてもらって、そして、チームを組んで仕事をしていく。そういうふうなやり方で、仕事の質を高めていく。また仕事の質を現在、世界におけるこの最高水準の仕事をお客さんに提供する。そういうふうな努力をする必要がある。そのことによって、客から高い信頼を獲得して、そして、商売が繁盛するという、状況に持っていくことができるわけですよね。**

**もし、お客さんに、自分が専門と言えるこの領域のことでないことで質問されたときには、はっきりと、本当はそれは、私はプロとして知ってなきゃならんことなんですけども、残念ながら、そのことについてちょっと自信を持って答えられませんので、ちゃんと調べてまた報告に来ますと言って、そして、そのいいかげんなことを言ってしまわないで、会社に帰ってきて、その専門の領域の人にちゃんと話を聞いて、そして、こうこうこうでしたと言って、もういっぺん、そのお客さんのところへ行って、その結果をちゃんと納得してもらえるように説明をする。そうすることが、かえって客の信頼を高めることになるわけですね。その場でいいかげんなことを言ってしまうと、あとからそのことが、実は間違いだったということになってきたら、会社の信頼が、がた落ちになってしまうんですよね。そのためには知らんことは知らんとはっきり言って、だけど、知らんで終わってしまわないで、ちゃんと調べて報告に来ますと言って、そして、もういっぺん、そのお客さんのところへ行って、こうでしたと言ってちゃんと説明をする。それがですね、あの会社の人は信頼できる、うそは言わん、いいかげんなことは言わん、確かなこのことを言う人だという評判を得て、その人だけじゃなくって、会社の値打ちも上がるというね、ことになってきます。**

**知識というものが、不確かなものか、確実なものかということは、ものすごく重要な会社の信頼や人間の信頼を左右する、非常に大きな問題だということをわれわれはよく知っておる必要があると思います。だけど、世間では、本当にいいかげんなことを言う人が多いんですよ。この知ったかぶりということじゃなかったとしても、ちょっと聞きかじりで知ってることをいかにもよく知ってるかのごとく、言ってしまったりなんかして、それがこのあとから、確かなことじゃないようなことになったときに、本当にもう取り返しのつかないね、信頼をなくすようなことになってしまう場合がよくあります。そういうことになると、会社の信頼に傷を付けますから、ぜひ自分が持って、自分がプロとして使う知識や技術というものは、常に根拠から明確な確かなものにしていく。そういう努力を、積み重ねて、続けることが非常に大事な課題だというふうに考えておかないといけません。**

**どんな仕事をする場合でもそうですけど、やっぱりプロとして仕事をするからには、その仕事の水準において、自分の仕事は世界の最高水準のレベルのもんなんだということを自分がこの言えて、それがちゃんとできてなかったならば、お客さんに対して申し訳がないという、そういう自覚が大事じゃないかと思うんですね。今の時代の最高レベルの仕事ではない、低いレベルの仕事をしてるというような、このことでは、お客さんに対しては申し訳がない。やっぱりプロならば、今の世界のその仕事における水準の最高レベルの仕事をちゃんとお客さんに提供してる。そこにプロとしてのですね、誇りがあるわけなんですね。そういうこの意識を持って、自分の獲得した知識や技術を常に確かなものにし、またその知識や技術を常に最高水準のものにして、それをお客さんに提供していく。そこに自分のプロとしての誇りがある。そういう自信を、ぜひ持ってもらいたいと。これもやっぱり人格の高さという、そういう面からすれば、欠くことのできない重要な課題であります。**

**次、第２番目ですね。第２番目は謙虚さですね。謙虚さのない人間に人格の高さは感じません。これは前から言ってることですけども、傲慢になったとき、人間は人間であることを根底から失脚をする。人間は存在論的に言って、あらゆる面で不完全なんですから、だから、傲慢さ、慢心が出てきたら、もうその人間は人間としての価値を根底から失うんだということを、考えておかなければならない。だから、先ほど申し上げたように、この人格を磨くという、人格の高さをつくるという以前に、謙虚さと成長意欲と愛、この３つのものは、人格というものを形成する根本原理として、常に押さえておかなければならないもんだということを申し上げました。謙虚さがない人間に人格の高さは感じない。傲慢な人間に人格の高さを感じることはない。傲慢な人間を尊敬できるはずはない。その意味で、謙虚さというものも、非常に大事な人格の高さというものをつくり出す非常に大事な基本原理だ。**

**自信というものは、もちろん、なければならないんですけど、だけど、自信だけでは、自信過剰になってしまったりなんかしちゃったりなんかして、その自信過剰が、かえって人に嫌な思いをさせるということになってしまう場合があります。自信過剰になってしまわないようにするために、謙虚さというものが、常に一対のものとして必要なんですね。自信と謙虚さというものは、人間が社会を生きていく場合に、この常に一対のものとして考えておかなければならない重要な原理です。謙虚さというものがどんなに大事であっても、謙虚さだけでは他人から評価されません。自信がある人間が謙虚にすると、あんなにすごい人やのに、なんて謙虚なんでしょうと尊敬されるんですけども、自信のないこの弱い人間が謙虚にすると、こびへつらいに見えて、弱さの表現になってしまう。だから、いかに謙虚さは大事だといっても、その背後に自信というものがないと、謙虚さも価値を持たない、人間においては。また、どんなに自信が大事だといっても、謙虚さのない自信は傲慢、慢心というものをつくり出しますので、またこれも人間的な価値をなくしてしまう。その意味で、自信と謙虚さというものは常にわれわれが一対のものとして意識していなければならない人生を生き抜く基本原理だということなんですよね。**

**そこで、謙虚さというものが、常にこの弱さではなくって人間としての価値を表現するものとして、謙虚さというものが命からにじみ出てくるという、状態にしていくためには、どういうことが大事なのかということを、知っておいてもらう必要があります。謙虚さがにじみ出てくるという、そういう状態に自分の命をしようと思ったら、どういうことが大事なのか。これは前々からも、ずっとお話をしてることで、何回も繰り返して申し上げてますので、もうわかってる方もいらっしゃると思うんですけど、とにかく人間が謙虚さという、そういう意識がね、にじみ出てくるという状況になるためには、まず基本的に２つのことを考えなければならない。その１つはですね、人間はどんな人間でも、長所、短所、半分ずつあるんだ。必ず自分の中には、他人から非難され、他人から軽蔑され、他人から嫌われるところが半分はあるんだ。また自分の中には他人から評価され、他人から尊敬され、他人からこの称賛されるような、そういう面も半分はあるんだ。人間はどんな人間でも、長所、短所、半分ずつ持っておるんだ。という人間観を、自分自身がこの常に忘れないで、心の中にとどめておる。これが、傲慢にはならない、謙虚な意識が常に湧いてくるという状態になる、大事な権利です。**

**謙虚さというのは、短所を意識することによって謙虚さが湧いてくるというふうにだけ理解してしまうと、謙虚さは弱さになります。謙虚さはこびへつらいになります。だけど、俺の中には他人よりも優れたところが半分もあるんだ。だけども、他人よりも劣ってるところも半分もあるんだ。このバランスが、謙虚にしてもこびへつらいにならない。謙虚にしても弱さの表現にならない。人間としての品格のある謙虚さというものを保つことができるというですね、この原理なんです。謙虚さというのは、ついつい何かしらこびるような、そういうこの態度になってしまいやすいです。あるいは、あまりにも謙虚さがこの商売上ですね、この身に付いてしまうと、なんかこう、無礼みたいな状態になってしまうこともある。謙虚さというものが、嫌みじゃないような、そういう謙虚さとなってくるためには、自分の中には他人よりも優れたところも半分ある。だけど、他人よりも劣ってるところも必ず半分あるんだ、そういうバランスというものを、ちゃんと人間的な理解として持っておって、そして、短所が半分あって、それはなくならないんだ、だから、人間は決して傲慢にはなれない。そういうふうな意識で、謙虚さというものを持ち続けることが大事であります。**

**謙虚さが湧いてくるという状態というのはどういうことなのかといったら、謙虚にしなくちゃ、謙虚にしなくちゃと思ってるあいだは、まだ謙虚さは身に付いてない。いわゆる意識的に謙虚にしているという状態なんです。それはある意味で、こびへつらいに近い状態に見えることがあります。多くの人が、お客さんに対しては親切で、丁寧で、謙虚じゃなきゃならんという、そういうこの商売上の必要性から、そういうことを考えておる人が多くて、ということになってしまうと、相手が客じゃないとわかったら、いっぺんに傲慢になっちゃうというのは、変身みたいな感じで態度を変えてしまうというような、そういう人も随分おるんです。そして、謙虚にしなくちゃ、謙虚にしなくちゃ、客に対しては謙虚にしなくちゃと思ってると、客じゃないとわかると、謙虚じゃなくなってしまうという状態になってしまうんです。**

**これは謙虚というものを商売の道具にしてるというか、その商売の飾りにしてるという、そういうものであって、『飾りじゃないのよ涙は』ですからね。やっぱりにじみ出てきてこそ本物ですからね。だから、その謙虚さも商売の道具で飾りをしてんじゃなくって、命からこの常に、にじみ出てくるというふうな、そういう状態にするためにはどういう自覚が大事なのかということなんですね。そういうことを考えていくと、常に人間は長所、短所、半分ずつある。他人よりも優れたところを半分持っておるけども、他人よりも劣ってるところも半分あるんだ。そういう自分の人間性に対する認識がちゃんと身に付いてくれば傲慢にはなれない。傲慢にはなれない自分というものが、ちゃんと確立されて、そして、この慇懃無礼ではない、またこびへつらいではない謙虚さというものが、ちゃんとバランスよく湧いてくるようなね、そういう状況になります。本当に価値ある謙虚さというものが自分の身に付くためには、人間観として、人間はどんな人間でも、長所、短所、半分ずつあるんだ、長所もなくならないし、短所もなくならないんだ、という自分自身の人間性に対する認識というものを基本的にちゃんと持っておる、そのことによって、常に謙虚さが、にじみ出てきてるという、状態の自分というものを維持することができます。**

**短所がなくならないということが問題を含んだ言葉として誤解されて理解してしまわれる場合が非常に多いんですよね。短所はなくならないんだから、なくさなくてもいいんだ、短所をなくそうとする努力はせんでもいいんだという、そういうことで、短所はあっていいんだといって開き直ってしまうようなね、そういうことになってしまったら、これは人間ではありません。短所があるんだということをちゃんと知ってるということが大事であって、知ってるとはどういうことなのかといったら、短所が出てくれば嫌われるから、短所が出てこないように注意をするというのが、人間的な謙虚さなんですよ。短所はあっていい。短所をなくす努力はせんでいいんですけど、俺にはこういう短所があるんだということを知っておって、短所が出てくれば、他人に迷惑を掛けたり、他人に嫌な思いをさせるから、だから、短所はなくす努力はせんでもいいんだけど、あんまり出てこないように注意をするということが、謙虚さなんだ。非常にこれは複雑な問題で、単純なことではないもんですから、ちょっと厄介ですけども、これは非常に、大事なことである。**

**これは、真理と真実の違いということにも関係しておって真理でいったら、長所はいいけど、短所はいかんということになってしまうし、また、善はいいけど、悪はいかんちゅうことになってしまう。だけども、真実の世界というのは、善もあるけど、悪もなくならない。表があれば、裏があるというのは真実の世界なんですね。理性的に真理で考えれば、表はいいけど、裏はいかんことになるんですけど、裏は表と同じ量だけ、半分はあるんですよ。表がたくさんあって、裏が少ない紙なんちゅうようなものはありようがないので、表と同じ分だけ裏があるのが現実であって、真実の世界なんですよね。そういうこの真実の理解に基づいて、人間というものを見た場合、われわれはどういうふうに謙虚さというものを考えなきゃならんかといったら、どんな人間でも短所は半分ある、短所はなくならないんだ、だけど、短所はあっていいんだって開き直ってしまったら、これは人間性ではないと。自分にはどういう短所があるのかをまず知ることが大事である。そして、短所が出てきたら嫌われるし、迷惑を掛けるから、できるだけ短所は出てこないように注意をする。これは相手に対する愛であり、相手に対する心遣いである。それをもってして謙虚さというんだ。これが真実の理解なんですね。**

**真理で考えたら、長所はいいけど、短所はいかん。短所はなくさないかんということになってくるんですけど、それは真理で考えた場合だ。真理で考えたら、善はいいけど、悪はなくさないかん。悪のない社会をつくる。それが真理で考える、考え方です。だけども、悪は常に社会に半分あるんだ。社会の半分は悪なんだ。社会の半分は善なんだ。善と悪は常に半分ずつあるんだ。どんなことでも、プラスにもマイナスにも評価できるんだ。常にプラスとマイナスは、善と悪は半分ずつあるんだ。どんなにいいことをしても、必ず半分の人間には迷惑を掛けてるんだ。それは真実の理解なんだ。小泉さんがどんなに素晴らしい改革をしても、改革というものは、その改革によって得する人間が半分、またその改革によって不利益を被る人間が半分出てくる。これは避け難い宿命なんだ。必ずプラス面とマイナス面が半分ずつあるんだ。善も悪も半分ずつあるんだ。どんなに自分がいいことをしても、半分の人間は、あんないいことをしやがってなんていうようなことを言って、いいことした人間を恨んでる人間もおるんですよ。誰かがいいことをすることによって、困る人間もおるんですよ。それが偽らざる社会の現実なんだ。いいことをすることは、半分の人間には悪になってるわけですね。だからといって、いいことをしたらいかんわけじゃないんですよ。やっぱり、いいことせんないかん。だけども、この本当に謙虚な人間であったならば、本当の謙虚さがあったならば、いいことをしても、ひょっとしたらこの自分がいいことをした結果、誰かが悲しんでないだろうか。誰かに迷惑が掛かってないだろうか。誰かが嫉妬してないだろうか。誰かが恨んでないだろうかということをちょっと考える。そういう思いがちょっと心をよぎる。それが謙虚さというものの、あり方であります。**

**いいことはせんないかん。悪いことをしていいわけはないんだ。いいことをせんないかんのだけど、いいことをしても半分は悪なんだ。半分は必ず誰かに迷惑を掛けてるんだ。だから、いいことをしても、誰かに迷惑を掛けてないだろうかと思う心が謙虚さなんだ。短所があっていいといって開き直ったら、これは人間以前の愚かな段階というふうに、言わなければならない。短所はなくならないんだから、俺にはどういう短所があるのか、ちゃんと知っておる。そして、短所というのは出てきたら嫌われるから、出てこないように注意をする。それは相手に対する心遣いであり、思いやりであり、愛だ。こういうのが真実の理解という、方法であって、真理で考えるのと、真実、矛盾を内包した真実で考えるのと全然違う。真理は矛盾を排除するんですよね。矛盾があったらいかん。だけど、真実の世界は矛盾を内包して、初めてこのあらゆるものの本当の姿が見えてくるというのが真実の世界の理解の仕方であります。とにかくそういうことを考えると、人間はどんな人間でも、長所、短所、半分ずつあるんだ。そういう人間観というものをしっかり、この自分の中に、納得させて、長所半分、短所半分という、その原理をこの自分自身が使いこなしながら、命から謙虚さがにじみ出てくる、そういう自分の人格をどういうふうにつくるかということを、考える必要があるわけであります。**

**もう１つのこの謙虚さをつくる原理というのはなんなのか。これは、近代は、あまりにも人間は理性に信頼を置き過ぎてきた。近代は人間の本質は理性だというふうに考えて、人間の持っておるさまざまな力の中で、理性しか本当に信頼できるものはないんだというふうに考えて、理性に対する盲信、そういうものを持って、今日まで人間は生きてきました。現在でも、自分が正しいと思うことは、最後まで主張するということが信念のある立派な人間といわれて、尊敬されるような状況が続いております。だけど、これが、理性的な傲慢さというものを人間につくり出す原理になっておって、この理性的な傲慢さが、この悪く出た場合には、この相手に譲らない戦争というものが生じて、お互いに殺し合うという状況に立ち至ってしまうわけであります。われわれは、理性に対する絶対的信頼というものを、持ち続けておる限り、人間同士の対立や戦争はなくならないということを、理解して、そして、本当に理性とはいったいどういうもんなのかということを、ちゃんと考えてみなきゃならない。なぜ、理性とはどういうもんなのかを、この原点に返って考え直してみるということを、今、しなければならない。また、そういうことをしようという気持ちに、今、人類はなってるのかといったら、理性を信じて、いろんなことをやってきた結果、自然破壊、環境破壊、人間性の破壊、そういう問題が出てきてしまったんですね。そこから人類は、本当にこのまま、われわれは理性のみを信じて生きていってもいいのかという反省が今、全人類的規模で出てきておるわけであります。**

**人間性の破壊の中には、離婚の激増、幼児の虐待、そして、違いを理由に殺し合う戦争。それが人間性の破壊という結果ね、出てきた現象なんですね。そういうことを目の前にして、このまま本当にわれわれはずっと理性を信じて生きていってもよいのか。そういうこの反省が、出てきておる。これを理性への揺らぎといって、これまで近代人が理性に対して持ってきた絶対的信頼が、今、揺らぎ始めてるという、そういう状態だということですね。そこでようやく人類は自然破壊、環境破壊、人間性の破壊という問題を目の前にして、もういっぺん理性とはどういう能力なのかということを原点に返って考え直してみなきゃならんという、そういうふうな必然性に追い詰められておるというか、立ち至っておるというふうに、言うことができるわけであります。**

**その理性という能力に対して、絶対的信頼を持って理性を盲信するということがちょっとおかしいんじゃないかというようなことは、19世紀の中ごろから、もう考えられておったんですよ。いわゆる実存哲学というのがあって、実存主義というのは、理性に対する批判というか、理性批判の哲学という考え方が実存哲学というふうにいわれるものです。その実存哲学というのは、19世紀中ごろから始まって、最初の実存主義の哲学者は、セーレン・キェルケゴール。もう１人は、フリードリヒ・ニーチェですね。20世紀に入ってからは、カール・ヤスパース、マルチイン・ハイデッガー、ジャン＝ポール・サルトル、本当にもう大哲学者がずらっときら星のごとく並んでおるというのが、実存哲学です。そういう大哲学者たちが、みんなこの近代人の常識である、理性だけは絶対信頼できるということに対して、なんかちょっとそういう考え方ではおかしいんじゃないかという疑問を投げ掛けてきました。**

**そういうこの実存主義の流れの中から、ジークムント・フロイドの精神病理学、すなわち理性によって人間は支配され、理性によって本能や感情や欲求がコントロールされ、抑圧されるということによって、人間性は破壊され、精神病になり、あらゆる病気が出てくるんだという原理をジークムント・フロイドは考えつくことになったんですね。実存主義という理性批判の哲学があって初めてジークムント・フロイドも出てくることができたわけであります。また、そういう流れの中から、1931年にはクルト・ゲーデルという数学者が、理性の不完全性というものを証明するというふうな、そういう論文を書きました。これもやっぱり、その理性だけを信じて生きていってもいいのかという、そういうこの反省が背後にあって、初めて理性の不完全性を証明しようというふうな、そういう試みも数学的になされるような、そういうこのことになってきたわけであります。**

**そういうことから、だんだんとこの理性というものの本当のあり方というものがいろいろ考えられるようになってきて、そして、今、私の感性論哲学では、どういうふうに言ってるかといったら、理性という能力は、確かに合理的に考えることができる素晴らしい力なんだけど、だけど、理性は合理的にしか考えることができない有限で不完全な能力なんだというふうに、理性というものを批判する、そういうこの立場に感性論哲学はあるわけですね。理性は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力である。そういうふうにこの理性を捉えることによって、理性的に傲慢な態度になってしまう。そういう自分というものをなくすことができる。理性は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力だ。だから、理性的には傲慢になれないというね、そういうふうな意識を自分の中につくり出すことができます。**

**だけど、じゃあ、なんでいったい理性はこの有限で不完全な能力というふうにね、言わなければならないのか。そのこともちゃんと、押さえていないと、根拠が明確でないと自信が持てませんので、根拠を明確にしなければならない。なぜ理性は有限で不完全なのか。そこには２つの根拠があってですね、１つは、人間はイコール理性ではない。人間は理性を持ってるけど、感性もあり、肉体もある。そして、肉体と感性の世界は理屈を超えた世界だ。人間がイコール理性であったならば、理性だけで人間の問題は全部処理できる。だけど、人間はイコール理性ではない。感性と肉体がほかにある。だから、理性だけでは人間の問題を処理し尽くすことができない限界があるんだ。そういうふうにですね、考えなければならない。**

**そして、人間は理性もあるけど、感性もあり、肉体もあるということは、人間は理性よりもより複雑な存在である。人間は理性よりもより高次元の存在であって、人間は理性のような単次元の、単純な存在ではないんだ。人間は理性もあり、感性もあり、肉体もある。理性よりも高次元の存在であり、理性よりも高度な存在であり、理性よりも複雑な存在なんだ。そして、理性という能力は、人間が持っておる能力の一つに過ぎない。すなわち、人間の持っておる肉体の中の脳という肉体に限定された能力が理性である。理性という能力は脳に限定された能力であって、人間の持ってる能力の一つに過ぎないんだ。だから、人間は理性によって支配されてはならないのであって、人間が理性を支配して生きなければならないんだ。人間は理性よりも素晴らしいんだ。そういうこの理解の仕方が、出てくるわけであります。そのことによって理性は、合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力だというね、そういうこの結論を出すことができるわけであります。**

**もう１つ、理性能力というものは、どういうふうにしてできてくるのかということを考えると、人間はおぎゃあと生まれたときには、考えることはできません。すなわち、おぎゃあと生まれたときには、理性はないんです。だけども、多くの方々が、人間はおぎゃあと生まれた瞬間に脳があるじゃないか、いわゆる140億個というふうにいわれる脳細胞を持って生まれてくるじゃないか、脳があるということは、理性が存在するということを証明してるんだというふうに、考える方がまだたくさんいらっしゃいます。すなわち、脳があるということは、理性という能力は人間に生まれながらに潜在能力として与えられてるんだ。理性という能力が先天的に与えられてるから、脳細胞が140億個、生まれながらにあるんだ。脳があるということは、理性の存在を証明してるんだというふうにね、この考える立場があります。**

**実際問題、今日でもそうですけど、理性は神から人間に与えられた独特の能力であって、理性があるということが人間の証明というか、人間であることの大事な証明であって、理性がないということは人間じゃないんだ。そういうふうなかたちで、理性という能力は生まれながらに、神によって人間に与えられてるんだ。人間しか持ってない能力ということは、神から人間に与えられた特別な能力なんだというふうに、考えて、人間の本質は理性、人間の本質は理性だというふうに考えてる。特にキリスト教の立場からの人間観というのは、そういう人間観を持ってる神学者が多いです。だけども、実際に、どうかというと、脳があるということは、脳というのは肉体の一部分であって、脳は精神ではないし、脳は理性ではない。しかも、人間は脳細胞を140億個持って生まれてきても小さいころ、オオカミにさらわれてしまって、オオカミの社会の中で生活をして、脳がオオカミの習性を覚えてしまうと、『狼少年ケン』になってしまったりなんかしちゃったりなんかして、人間ではなくなってしまうんですね。**

**実際問題、1920年にインドでオオカミ少女といわれてる子たちが２人発見されて、彼女たちは３カ月のころさらわれて、６歳ぐらいで発見されたといわれてるんですけども、発見されてからなんとか人間に戻そうとする努力をして、理性があるんだから、潜在的にあって、生まれながらに理性を潜在能力として与えられてるんだから、それを引き出そうと思ったら出てくるはずだというんで、なんとか人間に戻そうとして、理性能力を持たせるための努力をいろんな学者が関わってしたんですけど、だけど、結果としてはですね、片方の子はすぐ死んでしまって、もう片方の子は10年ぐらい生きておったんですけど、結果としては理性は出てこなかった。そして、ついに人間らしい心も宿らなかった。そして、人間の言葉もしゃべれなかった。生体は人間の生体を持ってますので、お母さんと言ったら、お母さんと言えるんですけど、だけど、お母さんがなんなのか。お母さんという言葉が何を意味してるのかということが全然わからないというね。ただ、お母さんと言ったら、お母さんって、オウム返しというか、九官鳥返しというか、インコ返しと申しましょうか、まねができるというだけのことであって、意味がわからんという状態で死んでしまったんですよ。そのことをもってして、もし理性が先天的に、生まれながらに与えられた潜在能力としてあるのならば、引き出そうと思ったら、出てこなければならないけども、理性は出てこなかった。ということは、理性は生まれながらに潜在能力として先天的に与えられてるもんじゃないということが、そこで証明されたことになったわけですね。**

**じゃあ、いったい理性はどういうふうにして人間に備わるのかといったら、その140億個という脳細胞が、まずは人間がつくった言葉を覚えなければならない。人間がつくった言葉をまず覚えて、言葉と言葉とを事実に合うように結び付けていくと、合理的に考えるという力が脳に備わってくるんですね。それが理性なんだ。すなわち、理性という能力は言葉の存在を前提してるんだ。言葉がなかったら、理性はないんだ。ということは、理性は言葉の持つ限界を背負っておるんだというふうに言わなければならない。言葉の限界とはなんなのかといったら、言葉によっては表現し尽くし得ないものがある。この言葉によって表現し尽くし得ないものを実態というんです。実態は言葉の表現からこぼれ落ちてしまう。だから、物事の実態をつかもうとする、そういうふうな努力をする場合には考えるなといって、座禅、瞑想なんかで、宇宙との一体感や永遠の生命を感じるというふうな、そういう実態と自分の命を合体させるというふうな、そういうこの悟りという境地を求めていく場合、考えたらいかん、理性を使うなというんですよ。理性を使えば言葉が出てくる。言葉が出てくれば実態はつかめない。だから、考えるなといって、ただ黙って座っとれというね、そういうというふうなことをさせるわけであります。**

**そういうことからわかるように、理性というものは言葉を結び付けることによって出てくる能力なんだ。言葉と言葉とを事実に合うように結び付けていくという作業をすると、合理的に考えるという力が脳に備わる。それが理性である。言葉とは抽象概念である。抽象概念と抽象概念を結び付けることが理性の仕事、理性の働きだ。だから、抽象的な世界なんです。実態はわからない。だから、どんなにたくさん知識を持っておっても、理性では実態はわかりません。だから、行ってみたらこうやったんやって言われたら、そやけどなって反論できません。行ってみたらこうやったんやと言われたら、どんなにたくさん知識を持っておっても、ああ、そうなんと言う以外にないんですよ。それほどに、体験というものと理性の持ってる知識というものを比べると、体験のほうに重みがあってね、理性が持ってる知識は関連的なもの、抽象的なもんですから、うそになってしまう。知識では実態はつかめない。**

**実際問題、現実は動いて変化しますからね。だけど、知識は固定化されますから、常に知識は**

**現実とずれてしまう。だから学問的知識というのは常にうそになるわけですよ。今日まで真理だといわれておったものが、明日にはうそになってしまう。それが学問の進歩、発展というね、この世界であります。その意味においても、理性の世界というものは、実態をつかめない言葉、言語、言葉というものを結び付けることによって出てくる能力なんだ。だから、理性は、有限で不完全な能力だというふうに言わなければならない。そういう２つの根拠があって、理性という能力は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力だというふうに、感性論哲学では考えるわけであります。**

**この数学者のクルト・ゲーデルが、数学的手法によって理性の不完全性を証明をしたというのは、あまりにも難しい論文で、ちょっと読んだだけではわからないんですよね。結論はわかっておっても、どういうふうにそれを証明したのかということは、専門家でも、なかなか理解しにくいところがあって、数学的手法といっても、数学というよりは記号論理学という論理実証主義という方法でそれを証明したんですけど、とにかくは、一応、数学者のクルト・ゲーデルがそれをやったので、一応、数学的手法で理性の不完全性を証明したということになってるんですけど、とにかくちょっと難し過ぎる。もっともっと一般に誰でもわかるようにそれを、語ろうと思ったら、今、私が申し上げたような、この説明の仕方になるわけです。そういうところから、理性は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力である。人間は理性よりも素晴らしい存在なんだ。人間は理性に支配されてはならないんだ。人間が理性を支配して、理性を使いこなして生きていかなければならないんだ。そういうふうな、ものとして、理性というものをわれわれは理解することができる。だけども、理性がこの不完全な存在だということは、理性に対するこれはマイナスの表現なので、必ずどんなものにもプラスの面がある。じゃあ、理性のプラス面とはなんなのか。そのことをちゃんと知らないと、実際に理性をどう使っていいのかがわからないんですね。マイナス面を知っておるだけでは理性の使いようがないんですよ。プラス面を知らないと、理性を使えません。**

**じゃあ、理性のプラス面とはなんなのかといったら、理性のプラス面は、理性は本当のことも言えるけども、うそも言える。本当のことを言うということは、事実に合ったことを言うのである。うそを言うということは、事実ではないことを言うのである。理性という能力は、この本当のことも言えるけども、うそも言えるという、そういうこの面を50％持っておるんだ。このうそが言えるということが、理性という能力の積極的な価値なんですね。というと、どういうことなのかといったら、うそを言うことができる力を理性は半分、50％持っておるってどういうことなのかといったら、理性は、50％は事実に支配されない、事実に拘束されない、事実に縛られていないという面を50％持っておるんだっちゅうことなんですよ。事実というのは現在と過去しかない。だから、事実に拘束されていない理性という能力は未来に対応できるんだ。理性しか未来に対応できる能力はない。未来とはなんなのか。未来とは、人間にとって未来とは理想であり、希望であり、夢であり、目標である。じゃあ、希望とか、理想とか、目標とはなんなのかといったら、それは今よりもよりよいことであって、絶対こうだというふうに言える世界ではない。未来とは、今よりもよりよい世界。それがこの未来である。ということは、どういうことなのかといったら、理性という能力は、絶対こうだというようなことを言う力はないけれども、理性はよりよいことを考えることができる力だというところに、その積極的なプラスの価値があるんだというふうに言うことができる。だから、理性能力を人間が支配して、この使いこなしていこうと思ったならば、理性をよりよいことを考えることができる力として使わなければならない。**

**じゃあ、どうするんだといったら、われわれが自分と違う考え方の人と出会ったならば、これまでのように自分の考えを正しいと思って、相手の考えを論破して、リベートで論破して、説得して、相手を自分と同じ考え方に変えてしまおうとうするような、理性の盲信を持ったそういうこの時代の使い方をしてはならない。自分と違う考え方の人と出会ったならば、自分の考えは完全ではないんだ。有限なんだ。不完全なんだ。だから、相手の考え方から何かをちょっと学んで、そして、自分の考えをより高度に成長させ、より厳密に成長させて、そして、その自分の考えをよりよい考え方に成長させて、そして、君と出会えてよかった、君と出会えて、僕は君からこのことを学んで、自分の考えをこのように成長させることができました。ありがとうと言って、自分と違う考え方の人に感謝をする。これが理性の正しい使い方であります。理性はよりよいことしか考えられないんだ。絶対こうだということは言えないんだ。だから、どんなことでも、こうしたほうがいいんじゃないか。こういうふうにしたほうがいいんじゃないか。こういうふうに考えたほうがいいんじゃないか。よりよい考え方を提案する。そこに理性という能力を人間的に使いこなす基準があるんだ。**

**絶対にこれが正しいといったら、それは傲慢になってしまう。こうしたほうがいいんじゃないか。ああしたほうがいいんじゃないかと言いながら、少しずつよりよい考え方に成長していくのが、不完全なる人間における理性の働きだ。こういう理性の働きを持つことによって、人類は戦争を乗り越えて、平和な世界をつくっていくことができるわけであります。自分の考えが正しいと思って、自分の考えで相手の考え方を説得するというやり方をやってる限り、戦争は永遠になくなりません。自分と違った考えに出合ったならば、自分と違った考え方の人から何かをちょっと学んで、このちょっと学ぶということが非常に大事な、ことなのであって、これから個性の時代だ。みんな違う考え方を持っておってもいいんだ。みんな違った考え方を持っておりながら、個性の時代はみんな仲よく生きていこうと思ったらどうしたらいいのか。そのために、まず基本的には、自分の考えは変えようとしたらいかん。大事なことは成長することだ。自分の考え方を変えるんじゃなくって、自分の考え方を成長することだ。**

**人間はみんな個性があるんですよ。変わらないんですよ。人間、変わらない。成長できるだけだ。自分の考え方を変えないで、成長するためにどうするかといったら、同じ考え方の人間とばっかり付き合っておったら成長できませんから、自分と違う考え方の人間と付き合って、自分にないものを相手からちょっと学んで、そして、自分の考え方を成長させて、君と出会えて、僕は君からこれを学んでこんなに成長できました、ありがとうと言って相手に感謝をする。それがお互いにできたならば、それが個性の時代なんだ。個性の時代というのは、相手の考え方がどんなに素晴らしくっても、相手の考え方を全部学ぼうと思ったら、相手に画一化されてしまうから、それはしたらいかん。大事なことは、自分と違う考え方の人間に出会ったら、今、自分にとって必要なものだけをちょっと学ぶ。ちょっとだけよって言って、ちょっと学んでですね、ちょっと学んで、今、自分に必要なものだけをちょっと学んで、その学んだことによって自分が成長できるという、そういうこの状態にしていく。今、自分に必要ないものを学ばないという、拒否する力も大事なんですよ。今、自分に必要なものだけを学んで、必要でないものは学ばない。常に必要なものだけを学んで、自分を成長させ続ける。これが自分を変えないで、自分を成長させる個性の時代の生き方なんですよ。そういうふうにして、君と出会えてよかった。うれしいと言って相手に感謝をする。そういう力が身に付けば、だんだんと人類は戦争を乗り越えて、考え方が違っても、社会体制が違っても、一緒に、宗教が違っても、共に生きていけるというね、そういうふうな生き方がだんだんとできるようになっていきます。**

**だけども、今日のように、自分の考え方と違うものは説得するか、妥協点を模索するか、そういうふうなことをやっておったら、結果としては永遠に対立や戦争はなくなりません。とにかく、この理性という能力が、合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力であるけれども、よりよいことを考えることができるところに理性の積極的な価値がある。そういうふうに理性を捉えることによって、われわれは人間が理性を支配して、理性を使いこなして生きていくという力を獲得することができるんです。個性の時代というのは、違うから対立するという、そういう時代じゃなくって、個性の時代っちゅうのは、違うんだから、教え合えるじゃないか。違うんだから、学び合えるじゃないか。違うんだから、助け合える。違うんだから、協力できるという、そういう意識が個性の時代を生きる意識なんですよ。そういうこの意識をもとにして、理性を使いこなしていこうと思ったら、今、私が申し上げたような理性の使い方をする以外にありません。**

**残念ながら、今の時代は、価値観が違ったら、一緒に仕事はできない。考え方が違ったら、一緒にやっていけない。感じ方が違ったら、一緒に生活できない。そういうふうなですね、まだまだ理性の傲慢さに支配された人間の状況にあります。だから、不幸なんですよ。これからわれわれは、その傲慢な理性を退けて、人間が理性を支配して、人間のために理性を使うという、そういう力を身に付けていかなきゃなりません。人間は理性の犠牲になったらいかんのだ。自分が正しいと思うことを主張して、正しさ故に人間が殺し合うということは、人間が理性の奴隷となり、人間が理性のためにあるかのごとく観を呈しておる。人間は理性のためにあるんじゃない。理性が人間のためにあるんだ。いったいなんで命に理性という能力が出てきたのか。それはより素晴らしい生き方をするためなんだ。殺し合うためじゃないんだ。理性は命のためにあるんだ。その理性が命を殺し合うような状況にして、どこに理性の価値があるのか。理性は人間のためにあるんだ。理性は命のためにあるんだ。より素晴らしい生き方をするために、命は理性をつくったんだ。命を殺すために、殺し合うために理性をつくったんじゃない。この理性と命との関係性、この理性と人間との関係性をちゃんとわからないと、戦争はなくなりません。また離婚は止まりませんよ。幼児の虐待も防げませんよ。理性に支配されておる限り、人間は永久に殺し合うという状況から脱却できません。その意味で、われわれはこの謙虚さというものを、身に付けるために、この理性能力とはいったいどういう能力なのかということを、しっかりと原点に返って考え直してみる必要があるわけであります。**

**その次は理想です。理想を持って生きる。人格の高さをつくっていこうと思ったら、理想を持たなければならない。理想のない人間に人格の高さは感じません。理想がないということは、何がしたいのと言われても、いや、べつに大して何がしたいことはありませんという、そういうことを言ってる人は理想がない人ですけども、そんな人を尊敬はできません。そんな人に人格の高さは感じません。理想というのは、これは現実よりもより素晴らしいものを理想と考えますので、そういう意味で、この現実よりもより素晴らしいものを考える理想を持てば、それは精神構造の中に、高さという構造が出てきますので、理想を持つことによって人格の高さを人に感じさせることができるというね、そういうことになってきます。理想こそ、この高貴なる精神です。理想がある、理想を持って生きるということが、高貴なる生き方をしてる、貴い生き方をしてる、そういうことになってくるわけですね。理想がなければ、現実に流される。理想がなかったら、他人の命令に従って動くしかない。何がしたいのって言われて、いや、べつにと言っておったんじゃ、他人に与えられたことをさせられてしまう。これは奴隷だ、家畜だ。**

**人間的な生き方をしようと思ったら、常に理想を未来に掲げながら、俺はこうなりたい、こうしたい、そういう意欲を持って、生きるということをしていなかったならば、人間として主体性を持って、自分の人生を生きているとは言えない。理想のない人間は、自分のない人間だ。理想のない人間は、自分の人生を生きられないんだ。そういう意味において、われわれは常に、未来に対して理想を掲げながら、現実を理想に近づけるために生きるという、そういう生き方をしてることが大事である。それが人間的な生き方ということなんですね。なぜかといったら、動物は与えられた現実にどう対応し、どう適応するかという生き方しかできないのが動物だ。だが、人間は与えられた現実をどう変えていくかという生き方をするところに、人間的な生き方の基本がある。現実をよりよい方向性に変えていこうと思ったら、理想がなかったならば、現実をよりよい方向性に変える力は生まれてこない。だから、理想を持って生きることが人間的な生き方の基本なんだ。しかも、理想を持つということによって、理想というものは、現実よりもより素晴らしいものが理想だから、だから、この理想を持つことによって意識の中に高さというね、そういう構造が生まれてくる。そこに人格の高さを人に感じさせるという力が、この出てくるわけですね。そういう意味で、人格の高さというものは、理想を持って生きることによって実現される、そういうふうに言うことができるわけですね。**

**最後の４番目は、理念への問いを持って生きるということですね。理念への問いとはいったいどういうことなのかといったら、人間としていかにあるべきか、人間としていかに成すべきか、人間としていかになるべきか、経営者としていかにあるべきか、経営者としていかに成すべきか、経営者としていかになるべきか、社員としていかにあるべきか、社員としていかに成すべきか、社員としていかになるべきか。そういうこのあるべき姿というものを、模索しながら生きてるということが、また人格の高さを表現する大事なこの基本原理になってきます。いかにあるべきかというと、それは理性やろうと。感性やないやろうとおっしゃる方も多いんですけど、だけど、このいかにあるべきかというこの問いは、人間、本当に真剣になって生きようとしたときにのみ、命から湧いてくる問題意識、問いなんですよ。だから、一見、理性的に見えますけども、これは理性という能力を、理性という能力を持つようになった命からしか湧いてこない高度な問いなんだ。理性は答えを出す能力ですけども、問題、問いは感性から湧いてくる。だから、問題はどんなに高度な難しい、一見、理性的に見える問いでも、問いは感性から湧いてくるんだ。理性は答えを出す能力なんだ。そういう意味で、本当に人間が真剣に生きようとすれば、誰でもいかにあるべきか、いかに成すべきか、いかになるべきかと問わざるを得ない。母親としていかにあるべきか、母親としていかに成すべきか、母親としていかになるべきか。父親として、いろんな言葉に、置き換えてそれを考えることによって、生き方にこの高潔さというか、高さというか、人間として尊敬されるような生き方がそこから生まれてくるわけであります。**

**なぜ理念への問いというものを持って生きるということが大事なのか。なぜ答えではないのかといったら、答えを持って、答えに縛られた人間ほど恐ろしいものはない。答えを持って、答えに縛られた人間は、自分と違う答えを持った人間と対立をする。それが自分を不幸にする原因だ。だけど、答えがなかったら、現実は生きられない。答えは求めていかなければならないんですけども、だけど、その自分が持った答えに自分が納得して、その答えに縛られてしまったら、その人間は対立を呼び起こして、秩序を破壊して、他人をも、自分をも不幸にするという、そういう人生に陥らざるを得ない。その極端な例が戦争だ。戦争は答えに縛られた人間たちがやってるんだ。答えに縛られた人間たちが離婚するんだ。考えが合わんといって、また自分が出した答え、自分の言うことに従わない子どもを虐待するのも、答えに縛られた親がするんだ。答えに縛られ、答えをもって、答えに縛られた人間ほど恐ろしいものはない。そのことを、われわれはよくかみしめて、考えてみなきゃならん。だけど、答えは必要なんだ。答えがなかったら、生きられない。だけど、答えに縛られたら、自分が不幸になるんだ。ということは、常にわれわれは、答えを持ちながらも、なおかつ、本当にこれでいいんだろうか、本当にどうするべきなんだろうか、常にその問いを忘れないで、問いを持ち続けながら、よりよい、より素晴らしい答えを求めて生きるという、そこにこのよりよいことを考える理性というものを使いながら、より素晴らしい人生を生きていくための方法論があるわけであります。**

**人生には答えも必要だけど、答えよりもっと大事なのは問いだ。問いを忘れれば成長は止まる。問題を感じない人間は現実が見えてないんだ。問題を感じてこそ、初めて現実はちゃんとわかってるということになってくる。なぜならば、人間も不完全だ。現実も不完全だ。問題がないと思ったとき、その人は現実が見えてないんだ。家庭にも問題がある。自分にも問題がある。組織にも問題がある。社会にも問題がある。問題があるのが現実なんだ。なのに、問題を感じないということは、現実が見えてないんだ。それほど恐ろしいことはないんだ。問題が見えてることによって、初めてあらゆるものは発展するんだ。夫婦の関係性でもね、女房のほうからいったならば、自分がどんなにさみしいか、自分がどんなにつらいかということを主人にわかってもらうだけで満足なんですよ。べつに解決してもらいたくはない。そんなにつらかったのか。ごめんねと言ってもらうだけでも上機嫌になるんですよね。問題があることを知ってもらうことだけで幸せなんだ。**

**ところが、その問題があるのに、その問題を知ってもらえないことが最も不幸なんだ。人間は不完全だから、問題を解決する必要はない。解決できるに越したことはないんだけど、解決する必要はない。どういう問題があるのかを知ってもらうだけで十分に心は満たされる。それほどに問題を知るということは、大事な人間的な課題なんですよ。その意味で、理念としての答えを持ってしまったら、それ以上、成長はしない。であるが故に、答えを持っておったとしても、なおかつ、本当はどうあるべきなんだろうか。もっといい答えはないのかという、そういうこの不完全なる人間故の無限の、施策を繰り返しながら、より素晴らしいものを求めていく。そこにこの人間的な生き方、あるいは考え方が違う人とも共に生きていけるというね、そういうふうな力が出てくる、この原理がそこにあるわけであります。答えも大事だけど、答えよりももっと大事なのは問いだ。問いを持たなければ成長は止まる。問いを忘れた人間は傲慢になってしまう。自分の考え方にこだわってしまって、他人の考え方を認めようとしない。これが答えに縛られた人間の恐ろしさだ。その意味でですね、この常にいかにあるべきか、いかに成すべきか、いかになるべきか。この３つの問いを自分に課しながらですね、今、この場において、最もこの適当と判断できる、そういう答えを自分がつくり出しながらね、現実を生きていく。**

**答えというものは、この人によっても違うし、また時代によっても違うし、民族によっても違うんですよ。だけど、問いというのは永遠なんですね。その意味で、答えのことを哲学では有限の知、有形の知、かたちがあるから、有形の知。またかたちがあるものは必ず壊れるから、かたちがあるものは必ず滅びるから、有限の知というんですね。答えのことを有形の知、有限の知。問いのことを無形の知、永遠の知というんですよ。問いは永久になくならない。答えはどんどん変わる。だけども、問いは永久に変わらない。問いは永遠の知、無形の知、かたちがないから壊れないんですね。無形の知、永遠の知、答えは有形の知、有限の知。そういうことからも、答えよりも、問いのほうがもっと根本的に大事なもんだ。こういうこの理念への問いを持って生きることによって、自分で自分を律するという、そういう自立の精神を持った生き方が出てくる。そういうこの自分で自分を律して、世の中の風潮に流されないという、そういうこの常に真実を見つめながら、自分を見失わないで生きていくということをするために、この理念への問いというものがなければならないんですね。理念への問い。**

**あるべき姿を見失ってしまうと、人間は現実に流されて、みんながやってるんだからいいじゃんといってですね、やってしまうというふうな、そういうこの不見識な、だらしない生き方になってしまう。みんながやっておろうと、やったらいかんことはいかんのやという、そういう自分で自分を律する力があって、初めて高潔なる人物というね、その貴い生き方が生まれてくるわけであります。そういうこの自分で自分を律する。世の中の風潮に流されないで、個性ある自分というものを、守り続けるというね、そういうふうなこの清廉潔白な生き方をしようと思ったならば、この理念への問いというものを忘れてはならない。そして、自分で自分を律するということによって、高潔というね、そういうこの人格の高さが生まれてくる。理念というものは、やっぱり現実よりも高いところに掲げるもんです。だから、理念というものを意識することによって、その人の意識構造の中に高さが出てくる。それが人に人格の高さを感じさせる、そういう力を持ってくるわけですね。**

**とにかく人格の高さというものを、自分のものにしていこうと思ったなら、まず基本的に価値への情熱、価値への欲求を持たなければならない。本当に俺の命の中に、どこまでもより高度なもの、厳密なものを求めていきたい。どこまでもより真善美を求めていきたいという、この価値への情熱が燃え盛っておるか。それを問わなければ、人格の高さは手に入らない。それは実践的なこの原理であって、さらにそれを、みんなに人格の高さを感じさせるというふうなね、そういうふうな広がりをつくっていこうと思ったら、精神的な努力の仕方も知る必要がある。精神的な努力の仕方というのは、この自信をつくる、謙虚さをつくる、理想を持って生きる。そして、理念への問いを持って生きる。こういうことを意識的に、実践していけば、人格の高さというものをより多くの人に感じてもらえる自分というものをつくることができるわけであります。**

**現実的には、本当に一番大事なのは、現実的には全社員が価値への情熱を持って生きることです。価値への情熱を持った社員をどれだけ多くつくれるか。それが社員教育の究極の課題です。価値への情熱を持った人間こそ、人間としての本物性というものを、備えた人間だというふうに言うことができる。全社員がどこまでもより高度なもの、厳密なものを求めていきたい。高度なもの、厳密なものに挑戦し、高度なもの、厳密なものを手に入れることの喜び、醍醐味、素晴らしさというものを感じたら、人間はその生き方をやめられません。そういうより高度なもの、より厳密なものに挑戦していくという社風をぜひつくってもらいたい。そして、どこまでもより真実なるもの、より善なるもの、より美しいものを求めていきたいという、そういう感性を、ぜひ養ってもらって、仕事の質をどんどん成長させていって、客を感動させるような、感動の仕事をつくってもらいたいと。それがこの人格の高さをつくるという、そういうこのことの結果、出てくるこの、実業というか、仕事における、課題であります。**

**これから日本人は、アメリカ人に代わって、世界の指導者としての役割を果たしていかなければならない。アサヒグローバルが世界の頂点に立って、全世界の建築業者がアサヒグローバルの水準を目標にしてくる。そういうふうな会社になることは、決して夢ではありません。だけど、そのためには、この価値への情熱、価値への欲求を持って、どこまでもより高度なもの、厳密なもの、より真なるもの、善なるもの、より美しいものを求めていくという生き方を全社員が心を一つにしてする必要があります。そうすれば、アサヒグローバルは世界の頂点に立つことができる。ぜひそういう思いを持ってね、みんなで頑張ってもらいたい。アサヒグローバルが世界の頂点に立つということは、自分自身が、また全人類から尊敬され、信頼できるような、信頼されるような人間になるということと同様の意味を持ってるわけですから、会社の発展がすなわち自分の成長だというね。そういうこの意識を持って、頑張ってもらいたいと思います。どうもありがとうございました。**